

明治23年(1890)11月15日、岩手県盛岡市の旧家に生まれる。本名成治郎、18歳で与謝野飲村・晶子主宰の新詩社に参加し「明星」に短歌を筆名碎花で発表する。

大正詩壇における民衆派詩人、理論家として顕著な活躍を示す。

カーペンター、ホイットマンの詩の日本への紹介者。

大正2年(1913)戸屋采訪。大正9年、田島マチと結婚。昭和14年(1939)宮川町の谷崎潤一郎のあとへ居住。兵庫縣を舞台にした大きな文化的業績を残す。

大正時代からしばしば中国大陸を旅行し、その広大な風土と文化に感化される。また、日本各地を旅行し、自然やそこに営まれる素朴な人々の暮らしをみつめた。登山愛好家としても知られ、多くの山岳詩を残している。

谷崎潤一郎「文章読本」(昭和9年刊)には、碎花の詩の朗読をたたえた一文がみられる。

昭和20年8月、戦災で母屋が全焼し多くの蔵書・研究資料を焼失。29年、友人たちの協働によって、現在の家(碎花設計)が再建。

昭和23年、第1回兵庫縣文化賞を受賞。

校歌・市町歌の作詞も多い。(靖道中学校、岩園小学校、芦屋大学附属高等学校・中学校、播磨学園高等学校・中学校・小野市歌・倉敷市歌など)

昭和59年10月17日、没、93歳。

昭和60年、蔵書・遺品が芦屋市に寄贈されたのを機に「富田碎花顕彰会」(会長 辻本 勇)が発足。

昭和62年3月、富田碎花旧居の保存整備が完成、5月に一般公開。

平成2年(1990)、芦屋市は富田碎花生誕100年を記念して、富田碎花賞を創設。

平成7年1月17日、阪神・淡路大震災により富田碎花旧居被災。

平成8年3月、富田碎花旧居の復旧工事が完了。6月から一般公開を再開。

### 寄贈資料

富田碎花の住宅は、戦災によって母屋・庫を残して母屋が全焼し、多くの蔵書・研究資料は2週間近く燃え尽けたということです。

戦前に収集された蔵書や交友の書簡がどのようなものか不明でしたが、寄贈資料の整理中に蔵から大正時代の草稿や詩ノート、書簡類などの貴重な資料が発見されました。

- (1)原稿類 漢詩、訳文、詩、短歌、作詞(校歌、市歌、歌謡)、評論、随想など。(ホイットマンの訳詩集「草の集」、カーペンターの訳詩集「カーペンター詩集」、詩集「地の子」、追悼文「芥川龍之介君を憶ふ」ほか)(約19,000点)
- (2)書簡・書翰類 大正・昭和の著名な文学者からのものが多く交友の深さがしのばれる。(谷崎潤一郎・吉田英治・西条八十・白鳥吾吾・北原白秋・長谷川如是閑・吉野源一ほか)(約2,000点)
- (3)雑誌類 明治・大正・昭和にわたる富田碎花ほか著作掲載を含む貴重な雑誌。(約9,500点)
- (4)書翰類 文学を中心として市況、歴史、民俗、宗教などに関する。(約8,600点)
- (5)地図類 本報や取込のある国内各地の地図(陸地調査部、地理調査所、国土地理院発行、その他の地図(ルートマップ、観光地図など))(約2,000点)
- (6)自筆・書跡 知人・友人などへ送られたもので、富田碎花ゆかりの方々の提供。
- (7)民俗資料 全国各地を訪れた際に得られたもの。
- (8)その他 詩の朗読を録音したレコード、身近な生活道品類。

### 富田碎花著作・訳詩集(抄)

- 詩集 『本日頭』・『地の子』・『富田碎花詩集』・『時代の手』・『登高山』・『下相く者』・『ひこばえのうた』・『兵庫讃歌』・『視差錯覚』・『富田碎花全詩集』
- 訳詩集 ホイットマン原著『草の集』(改訂、再改訂)カーペンター原著『民主主義の方へ』・『カーペンター詩集』
- 歌集 『恋しき愛』・『白神』・『歌風土記兵庫縣』・『橘日歌集』
- 評論集 『解放の空想』
- その他 『東洋文学序論』 『愛蔵史異議』 『アイランド文学研究』 雑誌など

### 富田碎花資料目録の刊行

- 第1集 書簡・書翰類 平成2年3月刊  
 第2集 雑誌類 平成4年3月刊  
 第3集 原稿類 平成6年3月刊  
 第4集 書跡類 平成9年3月刊

## 富田碎花旧居概要

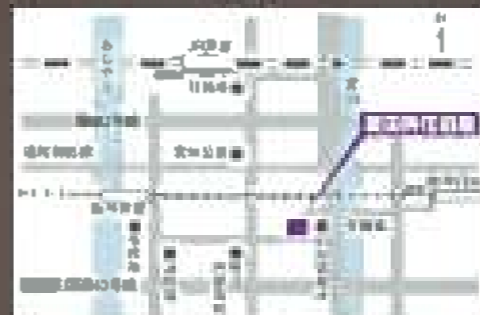
所在地 芦屋市宮川町4番12号  
 施設概要  
 敷地面積 333.88㎡  
 建物 木造平屋建 88.67㎡  
 (母屋・展示室・管理入室)

利用案内  
 開館日 日曜日および水曜日  
 ただし、年末年始(12月25日～1月4日)  
 8月13日～19日、10月17日を除く  
 開館時間 10:00～16:00(入館は15:00まで)  
 入館料 無料

旧居平面図



旧居地図



阪神打出駅から徒歩5分 阪神芦屋駅・JR芦屋駅から徒歩10分

お問い合わせ

芦屋市教育委員会生涯学習課  
 TEL0797-033091

# 詩人・富田碎花旧居

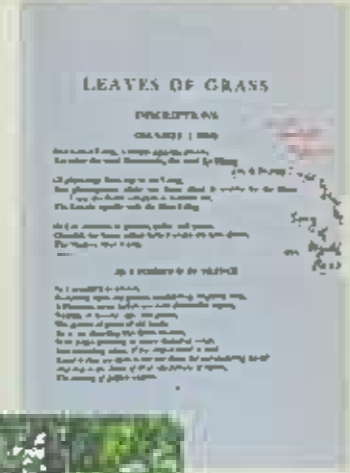
芦屋市立美術館博物館

「最良の詩人としての富田碎花」  
 富田碎花の生涯をたどる

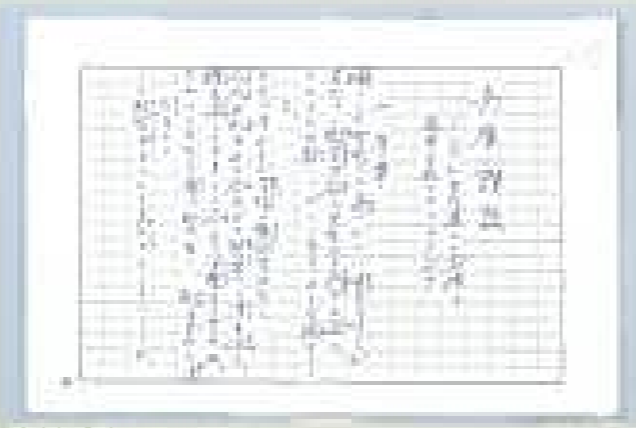


# 詩人

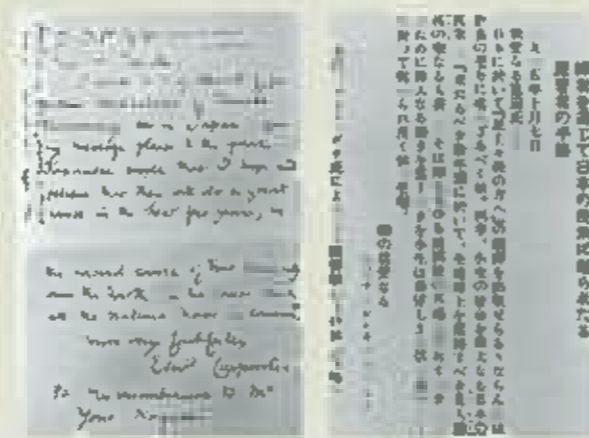
「草葉集」の原稿  
 詩花が随所に書きを入れている



富田詩花の墓  
 富田詩花の墓  
 富田詩花の墓



「兵隊讃歌」原稿、序章  
 富田詩花晩年の集大成『兵隊讃歌』の兵陣は、五つの章と反歌で構成され、丹波・但馬・摂津・播磨・淡路の五か国にわたる多様な兵隊の風土と歴史・文化が織り込まれている。



カーペンターから詩花へ送られた手紙  
 (訳書『民主々衆の方へ』から)



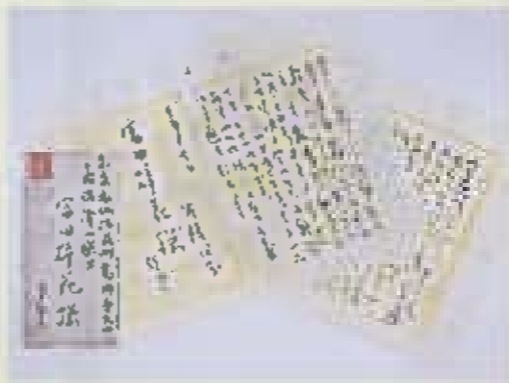
富田詩花の書



詩碑 詩花と詩碑「自然法爾」  
 (昭和43年春、兵庫県)



東京、大森の長谷川邸における種荷祭記念撮影(大正3年)  
 右から、石井直一郎(歌人)・川端竜子(日本画家)・大野隆地(洋画家)・富田詩花(詩人)・田中義作(美術評論家)・小林古径(日本画家)・松永信(ロシア文学者)・磯口大智(詩人)・大田栄元雄(音楽評論家)・長谷川潔(銅版画家)・森口多豊(美術評論家)・長谷川弘(洋の弟、詩人)・柳沢健(詩人、外交官)・日野歌之介(詩人)・北原白秋(詩人)



富田詩花の書

芦原の豊かな風土は、心のふるさととして多彩な文化をはぐくみ、数々の名作を生み出しました。

なかでも、詩人として高名な富田詩花の旧居は、昭和9年から11年まで谷崎龍一郎が居住したゆかりの地で、往時の面影を伝えるものです。

富田詩花は、歌集『悲しき愛』『歌風土記兵隊集』詩集『入日談』『手招く者』ホイットマン訳詩集『草の軍』・カーペンター訳詩集『民主々衆の方へ』・詩論集『解放の芸術』などを世に送り、大正・昭和の詩壇に大きな定礎を残しました。

芦原とは大正時代の初めからかかわりがあり、昭和9年芦原定住後もその文学活動はさかんなものとなりました。

戦後も詞作のために全国各地を旅し「ひこばえのうた」・長編詩『兵隊讃歌』を公にするともに、50余編にのぼる校歌や市町歌を作詞されるなど、その多彩な文化的業績から、「兵隊集文化の父」ともよばれました。

惜しくも昭和59年10月17日、93歳で亡くなりましたが、60年4月、ご遺族の意志で残された蔵書・研究資料のすべてが芦原市に寄贈されました。市は詩花ゆかりの人々によって組織された『富田詩花顕彰会』の協力を得て、資料の整理をすすめるとともに、旧居を復元し、受けて、できるだけ元の姿をとどめた保存整備を行い、62年3月に完成しました。

ここを訪れる方々が、建物のたたずまいや展示資料から、情熱の詩人富田詩花の心を感じ取っていただければ幸いです。

